法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

編集後記

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
17
(開始ページ / Start Page)
64
(終了ページ / End Page)
64
(発行年 / Year)
1967-03-23

編集後記

○国文学会四十周年の記念行事が終り、すぐ本誌の編集に取りかかった。しかし時間が不足していた。そのためか続き物が多くなってしまった編集上の不手際をお詫びしたい。尤もこれからもじっくり取組んだ息の長い労作はのせていきたいと思うのであるが、本誌はその続きがほとんど前々号と連続するので読みづらいのではないかとおそれるのである。

○本号はしかし、諸先生方の力作を収め得たことで、十分つぐない得るものと信じている。編集委員の主張は現在教えておられる先生方にまず論考を寄せていただくと言う事であった。

そして、それとともにもう一つの強い希望は卒業された方々にどんどん原稿を寄せていただく事である。社会にでて、多忙な時間をさいてなされた研究から私達は真に学ぶことが出来ると思っているからである。昨日の学生が卒業生となろうとしている今、この事を再び強調しておきたい。

○戦後はどうも学校の特色と言うものが一般的になくなって来たようだ。これは単に学校数の増大という量的現象だけに由来しているのではないらしい。戦後は様々な研究上のタブーが解消した。そしてそのもとで形成されていた個人の、或は学派の身構えた姿勢もなくなってきた。こうして嘗ては個々人の生活態度と不可分に結びついていた研究上の方法が、今はいつ誰でも容易に使用できる方法となってきたのである。つまりM・ヴェーバーの言う「ゼクテ」の精神がなくなったと言えよう。勿論、今日は文学の対象が比較にならない程豊かになり、蓄積された知識も多様かつ多面的であって、一つの方法では何事も処理できない事は確かである。

しかし、言葉上はともかく内容の右顧左眄的なものが氾濫している。ここから、巧みであると感ずる業績はあっても、強烈な刺戟を受けるものにはいたって乏しいと言わざるをえない。偉大という形容詞を冠するに足るものは、間違いがないのではなくその誤謬からすらも深く学べるものであることを改めて銘記したいと思う。

○所で法政の日本文学科を培かって来られた近藤忠義先生はこの三月で退職される。先生は三十一歳で法政に来られた。今や六十五歳になられる。確かに日文科も一つの年輪を刻んだわけである。先生の学的生涯は一言でいえば、日本文学の研究に学問的基礎を与えようとする苦闘であったといえよう。その学問的方法は生活の隅々まで貫いていた。これあって始めて無類の非人間的時代から文学研究を守って来ることが出来たのである。

今、形式的墨守でなく、前述した学問的状況のもとで伝統を確かめることは容易でない。本誌のさらに一層の飛躍をはからねばならない所以である。

（島本　昌一）

一九六七年三月二三日発行

日本文学誌要　第一七号

編集　法政大学国文学会

印刷　東京都中央区銀座東三ノ七
東銀座印刷出版株式会社
電話〇三(542)三九四一～五

発行　東京都千代田区富士見二ノ一七
法政大学大学院内
法政大學國文學會
電話代表〇三(262)二三五一
振替　東京　六九四三